

釜石で「希望学」調査進む

働くこと、夢、やりがいを説く リーダーの 大平など3中学校で講演

リーダーの
玄田助教

東京大学社会学研究所が釜石市で行う「希望学」プロジェクト調査のリーダー玄田有史助教(42)は25日午後、市立大平中学校(須藤和子校長、生徒201人)で講演した。「働くってどういうこと?」のテーマで1時間語った。全校生徒と保護者、住民が聴講した。玄田助教は29日までに甲子、唐丹の2中学校でも講演する。



同助教は「夢をかかえる3つの方法」を語った。20-49歳の約千人に職業的「希望」の有無を調査したところ、中学生3年生にはあったものの、「今の仕事にやりがいがある」「別の希望を見つけて、やりがいがある」の割合は高く9割に達する。夢、希望はあったほうがいい。さらに、考え方を変え、軌道修正しながら自分の仕事に出会う人が大半だということ。

「つまりそれは、夢とやりがいに出会えるか」について、玄田助教は、やりがいのある仕事を見つけて、ための姿勢を大平中学生に説いた。

「分らない」から逃げない。チャレンジすること。今、分らないことがあっても、逃げないこと。それは、社会に出た時の訓練ととらえる。楽なほうに流れないで、もっと悩んでいい」とエールを送った。

生徒会長の東谷大樹君(3年)が「将来、やりがいのある仕事を見つけて、のために、チャレンジし努力したい。講演、ありがとうございました」と謝辞を述べた。

希望学プロジェクトは、希望とは、どのような社会に希望が生まれるか、個々の希望が社会や地域にどのような効果を与えるのか、などの諸テーマについて、研究所に所属する法学、政治学、経済学、歴史学、社会学

の多面的な視点で考察する。玄田助教は今年1月、5月、7月にも来訪したうえで、この24日から30日まで30人規模で釜石調査を行っている。調査の形態はアンケート、インタビュー、文献資料の精査など。

また、調査に訪れている各分野のエキスパートが講師を引き受ける市民特別講座(公開)が24日の玄田助教以降延べ3日間、4講座が開かれている。きょう26日午後6時半から釜石ベイシティホテルで、広渡清吾教授(専門分野はドイツ法、比較法社会論)が「女と男をめぐる法制度」ドイツと日本を比較しながら。28日午後6時半から、釜石市民文化会館中ホールで宇野重規助教(同政治思想史、政治哲学)が「シタンはなぜ頭突きをしたのか」多民族社会フランスの苦悩、引き続き平石直昭教授(同日本政治思想史)が「福沢諭吉の『市民』精神」のテーマで語る。